

# 環世界と市民活動の世代継承について

山村 美保里<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 工博 愛国学園短期大学

(〒133-8585 東京都江戸川区西小岩5-7-1, E-mail : yamamura@aikoku-jc.ac.jp)

風景は見る人によって認識される内容が異なることと、市民活動の次世代継承との関連を考察した。ユクスキュルの環世界及び沢田允茂の認識の風景において論じられている、人の知覚する風景は普遍的ではなく主観的なものであるという見解を、市民活動の活動主体世代とその継承を期待されている次世代の活動対象の認識の相違に援用し、その相違が継承を難しくさせている一因である可能性を指摘した。

キーワード:環世界, 認識の風景, 市民活動, 世代継承

## 1. はじめに

### (1) 背景と目的

同じ風景でも、見る人によって見え方が異なることは、様々に論じられてきた。その要因として、ホールは人間の行動を決定する身に着けた文化<sup>1)</sup>、トゥアンは自分の行動を方向づける習得された経験<sup>2)</sup>、Twiggerは地域への愛着の有無による地域環境の捉え方<sup>3)</sup>、Hayは場所への関わり方の違い<sup>4)</sup>等を述べている。ユクスキュルは、主体が知覚から得て構築する世界を「環世界(Umwelt)」と定義してその内容を様々な生物の観察から導き、人間も同様であることを示した<sup>5)</sup>。沢田は、人の環境の眺めである風景は、ユクスキュルの環世界と同じであるという<sup>6)</sup>注1。これらは、主体が環境から知覚する風景は、客観的普遍的なものではないという立場である<sup>注2)</sup>。

また多くの市民活動は、世代継承が課題であるが、要因は明らかになっていない。継承を困難にする一因として、活動主体の地域や活動に対する視点が、人や世代によって異なることが考えられる。

そこで本研究は、先行研究の風景の見え方が異なる見解を整理し、その思考を用いて市民活動の世代継承が難しくなっている要因を考察することを目的とする。

### (2) 研究の位置づけ

風景が個人によって異なることに着目した研究は多くはない。中村は「日々、鍬と鋤を握りしめ、土と格闘する農民にとっては、良い土地はあるが美しい土地はない」<sup>7)</sup>と指摘している。笠原は風景を改変できる立場の人々の「見かた」から、風景は見る主体の経験や文化的な環境認知の枠組みによって規定されることを<sup>8)</sup>、神山は土佐日記に記された舵取りと貫之の発言から、同じ風

景から読み取る情報が異なることを、明らかにした<sup>9)</sup>。

市民活動の世代継承の研究は少ないが、山村が諏訪湖清掃活動の成功事例の要因を指摘した<sup>10)</sup>注3。

本研究は、上記の同じ対象でも主体によって得る情報や行為が異なるという立場の延長に位置し、その見解を整理援用して、市民活動の次世代継承の課題の実証的考察を試みるものである。

### (3) 研究の方法

2章で、ユクスキュルの「環世界」と沢田の「私の風景」に関する事項を概観し、その他の先行研究とともに、風景が主観的なものであるとする論考を整理する。本文中ユクスキュルの『生物から見た世界』の引用は(生, 頁数)、沢田の『認識の風景』(認, 頁数)とし、参考文献に個別には記載しない。頁数は三桁数で表記した。

3章では、筆者が研究対象としてきた佐賀県白石町須古地区の縫ノ池湧水会関係者と、茨城県古河市古河公方公園の雑木林管理団体もりもりクラブ会員へのヒアリングから、対象者の子ども時代の環境及び過ごし方を抽出し、それらが現在の活動対象の認識及び活動の継承に影響している可能性を考察する。湧水会、もりもりクラブとも多様な活動を行っているが、本稿は活動を行う主体の環世界の相違に着目しており、煩雑さを避けるため湧水会では魚取り、もりもりクラブでは外来種の除去に限定した。各活動を開始したのは現在70代の世代であり、本稿ではそれらを活動主体世代、その活動の継承を期待されている現在30~40代を次世代とした。

魚取りと外来種除去に関する環境の変化の状態を示すため、湧水会は縫ノ池の水の有無を、もりもりクラブでは現在も公園で駆除対象である代表的外来種の国内初確認の年(国立環境研究所:侵入生物データベース、

[https://www.naro.go.jp/publicity\\_report/press/laboratory/niaes/160404.html](https://www.naro.go.jp/publicity_report/press/laboratory/niaes/160404.html), 2024年8月26日参照)に着目し、外来種はその後に身近になったものとして考察した<sup>注4</sup>。ヒアリングの概要を表-1に示す。

表-1 ヒアリングの概要

団体	本文中の記載方	活動団体の役職又は活動団体との関わり方	年齢	聞き取りした年	備考
湧水会 (白石町須古地区)	A氏	湧水会事務局長、地域づくり協議会委員	70代前半	2014～2024年	湧水会設立の2001年から事務局長を務める
	M氏	湧水会会長	70代前半	2024年	地区会長と兼任、任期2年
	T氏	寺院住職、地域づくり協議会委員	40代前半	2022、2024年	湧水会会員ではないが、地域づくり協議会会員として湧水会活動の支援をしている
	N氏	神社職司、地域づくり協議会委員	30代後半	2022、2025年	
古河公方公園	K氏	もり代表	70代前半	2018～2024年	2008年活動開始から代表を務める
	Y氏	もり会員	70代前半	2022年	もり設立時から会員、近年は参加が困難
	S氏	もり会員	30代後半	2021～2022年	2019年入会、居住地が遠方のため参加は限定的

## 2. 見る人によって認識が異なる風景

### (1) ユクスキュルの環世界

生物学者のヤーコブ・フォン・ユクスキュル(1864-1944)は、知覚する環境は主体によって異なる主体的なものであることを、昆虫や鳥類等の具体的かつ多様な生物の観察例から明らかにした。本節では、ユクスキュルが提唱した環世界の概要を示す。

#### a) 機能環と環世界

生物は固有の感覚機能で環境を知覚し対象物(客体)に作用する。昆虫のマダニは、視覚は無く臭いと温度に反応して作用するが、人間は五感によって得た情報を基に対象物に作用する。このような感覚機能によって環境を知覚し作用するサイクルを「機能環」という(生, 019)。主体が知覚する知覚世界と、作用する作用世界が共に一つの完結した全体を作り上げているものを「環世界」(生, 007)という。それは機能環によって「どの主体も、事物のある特性と自分との関係をクモの糸のように紡ぎ出し、自分の存在を支える網に織り上げる(生, 028)」世界のことである<sup>注5</sup>。

#### b) 環世界の形成

主体自身の知覚物で埋め尽くされた環世界は、昆虫は予めセットされた設計プログラムに従っているが、人間などの学習する種は、主体の個人的体験が繰り返されるにつれて形成されていく(生, 133)。経験と学習によって動作可能かつ知覚可能な事項が増えることは、自己の世界が豊かになることといえる。

#### c) 主観的世界

人間の知覚している環境に多様な生物が存在しているという人間中心の普遍的な環境があるのではなく(生, 143)、生物がそれぞれ独自の知覚機能によって環境を知覚して空間や時間を構成しているという<sup>注6</sup>。そのような環世界は人間も同様である。知らない土地をその土地に詳しい人に案内してもらおうと、土地の人は、よそ者

には見えない道(なじみの道)を確信をもってたどっていくことで環世界が形成されていることがわかる(生, 099)。人間の個々人の環世界は、それぞれの経験や学習によって構成された異なる主観的世界であるといえる。

### (2) 沢田允茂の「私の風景」

哲学者の沢田は、近代科学の孕む課題<sup>注7</sup>を背景に、風景の認識は文化や社会による影響を受けるものであることを論説した。

#### a) 風景の構成

風景とは、眼に見える私の環境である。個々人がそれぞれの自分の風景である「私の風景」を持っており、他人の見ている風景と自分のそれとは同一ではなく、すべての人に共通な普遍的な風景は存在しない(認, 031)。

「私の風景」は、私が生きて生存し生活することができるように私が構成したものである。構成とは、すでに存在している諸々の対象に、一定の秩序を与えることで(認, 047)、家族や地域の習慣、社会の制度、知覚する要素の関係づけ、言葉などによって風景は構成されていく。ある知識を新しく理解することは、ゲシュタルトが変化し知覚の風景が異なって見えることに例えられる(認, 214)。ある知識をよく理解しているというのは、その知識が包括する表象<sup>注8</sup>が、全体の中でよく組織化され位置づけられていることを示している(認, 103)。

#### b) 風景の安定

風景の多くの部分が統一的な構造によって組織化され、構造の変更を必要とせず、私たちの行動を有効に導く基礎となっている状態を、風景が安定しているといい(認, 193)、例えば日常生活(認, 191)や信仰生活(認, 217)などである。

#### c) 新しい風景を創る力

風景の本質は、知覚される光景(シーン)ではなく、環境を知覚して構成するものであり、新たな環境の中で生きていくのに適した風景を創り出す力が重要である(認, 271)。近代科学の課題に対する新しい環境の風景を、言語活動や風景構成要素の関係に新たな光を当てることによって作らねばならない(認, 113)。

### (3) その他の研究と環世界

本節は、同様の視点のあるその他の研究の、環世界又は私の風景との関連を整理する。

Hayは、ニュージーランドのある観光地を対象にして、観光客、夏季の長期滞在者、転入者、生まれ育った人、アボリジニの各グループに場所に対する認識を調査し、場所との関わり方や感情的つながりによって場所認識が変わることを示した<sup>4</sup>。各グループの特徴が、他グループとは異なるのは、グループ内共通の環世界があること、



トを実施し、日々縫ノ池の朝夕の写真を撮り白石町に提供しているが、A氏の事務作業を請け負うことはない。T氏は自身の企画実施する行事に、縫ノ池の早朝散歩を組み込んでいる。N氏は東京勤務時代にスポーツトレーナーの資格<sup>31)</sup>を取得し、ヨガ体験を実施、さらに地域一体でのトライアスロン大会を計画中で、縫ノ池をゴールにして、名水である池の湧水でレモネードを作って飲むことを考えている。

地域は1950年代に農業が機械化された。A氏、M氏は機械化前の地域で、集団で遊びつつ水車回しや山へ柴刈り、水路清掃時の生き物採りなどの大人の農作業の手伝いを日常的にしていた。T氏、N氏の子ども時代は農業機械化後のため、農作業は大人だけに作業になった。

#### b)関係者の環世界と活動継承

本項では、湧水会のイベントの中で、魚釣り大会に限定して、環世界と活動の継承の関係について考察する。

小3生まで縫ノ池に水があり毎日のように池で遊んでいたA氏にとって、池は魚や貝などの生き物がいてそれらを見つけて採る場であった。今でも池を眺めるとどの辺りに魚がいるかわかるというように、池と魚の状態を知覚する機能環が有効に働き、魚を取る作用を行うことができる環世界を形成しているといえる。しかしM氏は小学校入学前に池に水がなくなり、子ども時代は裏山で遊ぶことが多く、A氏のような池で魚を取る面白さの実体験が乏しい。縫ノ池の魚を取るという環世界は希薄であることが考えられる。T氏、N氏は誕生時には縫ノ池に水が無く魚を取る経験もないため、池は魚を取る場ではない。T氏には散歩の場、N氏にはアスリートの水分補給の場として認識されている。

活動主体世代のA氏は過去に魚取りの面白さの実体験があり、それを現代の子どもたちに体験させるために魚釣り大会として実施している。しかし魚取りの面白さの実体験がA氏より乏しいM氏は、地域の子どものために魚釣り大会の手伝いはするが、主体には至りにくいと推察される。さらに下の次世代のT氏、N氏は、池を魚を取る場として認識していない。

魚釣り大会実施には、煩雑な調整や依頼、金銭面の管理や報告書づくりなどの作業が必要である。それらの負担をしてまで行うには、魚取りの面白さの実体験から体得した環世界の有無が影響していると推察される。

### (2)古河公方公園の雑木林管理団体

#### a)活動主体及び関係者からの聞き取り

茨城県古河市にある古河公方公園の市民団体もりもりクラブは、公園の中心にある雑木林の手入れを行っている。公園内において雑木林とその周辺は、在来種育成を

促進するエリアで、外来種の繁茂と駆除は活動の一つである。活動開始2008年以降の代表はK氏であり、次世代への継承を希望しているが、課題の状態である。

活動主体世代のK氏、Y氏の子ども時代は、高度成長期による環境改変前で、周囲に豊富にあった野原で草花を摘んで遊ぶ日々で、まだ外来種は見当たらなかった。今も公園内で、子ども時代に慣れ親しんだなつかしい草花を育て、開花させることは大きな喜びである(2022)。次世代のS氏は幼少期から昆虫好きで、昆虫との関係から植物を理解している。代表的外来種のセイタカアワダチソウも、昆虫にとっては晩秋の植物の少ない時期の貴重な餌になっていることを評価している(2021)。

#### b)関係者の環世界と活動継承

園内の植物を熟知しているK氏は、繁茂している中から瞬時に外来種を見つけて除去するが、筆者には違いを見分けることが難しい植物も多く、教えられてその場でできても、日を改めればまた見分けられなくなる。K氏は植物を知覚すると、在来植物と外来植物を識別する機能環が働き除去まで行う環世界があると考えられる。もりもりクラブの他の会員でも、筆者のように植物を見分ける機能環が貧弱、あるいは異なった環世界が形成されている場合、K氏のような外来種除去の継承は困難であると考えられる。S氏は昔の野原を理想とする徹底した在来種保護と外来種駆除という植物への向き合い方は、他者に理解されることが難しいと感じている(2022)<sup>14)</sup>。

活動主体世代のK氏には、ほとんどが在来種であったかつての野原を理想とした環世界があるが、次世代が遊んでいた頃には、外来種は既に身近になっており、在来種のみ環境に接する体験がない。次世代は外来種の害や見分け方を学ぶことはできるが、K氏と同程度の見分けと駆除作業を求めることは、難しいと推察される。

### (3)環世界と市民活動の継承

本節の二事例は、高度成長期に地域環境が大きく変わり、活動主体世代の子ども時代にはテレビやゲームは無く放課後は豊かな自然環境の中で子どもたちだけで遊び、時に大人の農作業の手伝いをしていたが、次世代の子ども時代は高度成長期後でテレビやゲームがあり、農作業の手伝いはしなくてよかった。魚取りに熱中した活動主体世代のA氏は魚釣り大会を企画実施し、秘密基地でゲームをして陸上クラブに熱中した次世代のN氏は、縫ノ池をトライアスロンのゴールにしたいと考えており、同じ縫ノ池に対して認識や作用する内容が異なる。同様に、活動主体世代のK氏は外来種除去に熱心に取り組むが、次世代のS氏にはその熱意は生じていない。

活動主体世代と次世代とは過ごした環境が異なるため、活動対象に対して異なる環世界が形成され、そうした環

世界の相違が、活動内容に関する特別な機能環が求められる行いの継承を難しくする、つまり継承する内容に対して同じように共感できる環世界の共有が必要であると考えられる。しかし共有がすでに困難な場合は、次世代に同じ環世界の形成を求めず、活動の理念や目的のみ継承できれば、具体的な方法は次世代の環世界で行い、それを支援することが重要であると考えられる。

#### 4. おわりに

本稿は、ユクスキュルの環世界及び沢田の私の風景で論じられている、人の知覚する風景は普遍的ではなく主観的なものであるという主張を、市民活動における活動主体世代とその活動の継承を期待されている次世代の、活動対象の認識に援用して、その相違が活動継承を困難させている可能性を考察した。そして環世界が異なる場合は、同じ熱意で継承することは難しいと考えられた。

しかしすべてを同様に継承するのではなく、縫ノ池はトライアスロンのゴールとして大会を実施し、公方公園は外来種をゆるやかに許容して昆虫を主体とする活動を取り入れるなど、新しいやり方で継続していくことが重要である。その後魚釣り大会を楽しんだ子どもが成人して実施するかもしれない、また在来種の貴重さに共鳴してその育成に熱心になる若者が現れるかもしれない。

伝統の継続には新しいチャレンジが必要であると言われるように、市民活動も次世代がそれぞれの環世界に基づいた新しい取り組みが行われてこそ、継続が可能となると思われる。沢田の「新しい風景を想像する力(3章2項)」とは、こうした新しい活動の共有から生まれるものと思われる。本稿では、少数の事例のみでの考察であった。一般化は今後の課題としたい。

#### 付録

注1：沢田は「ユクスキュルのいう知覚標識というのは、私の知覚の風景である」と述べているが、知覚標識は作用標識と共に主体が環世界を構成する要素であり、本稿では環世界とした。注2：昆虫などの学習しない生物は、設計されたプログラムに従って知覚している<sup>9)</sup>。

注3：山村は、市民活動の持続には、活動誕生の契機となった必ず行う「基本的活動」と、活動を活性化させる新しいチャレンジ「時流による活動」の両方が必要であるとした<sup>10)</sup>。

注4：外来植物がいつ頃どの程度繁茂したのか、詳細は明らかになっていない(農研機構：日本には毎年何種の外来植物が侵入していたか 開国以降約150年間の推移を解明, 2024年8月参照, [https://www.naro.go.jp/publicity\\_report/press/laboratory/niaes/160404.htm](https://www.naro.go.jp/publicity_report/press/laboratory/niaes/160404.htm))。

注5：主体と環境の客体との関係は、常に主体の外に生じると記されている(生, 028)。和辻『風土』1章の「外に出ている」の見解が連想される。

注6：時間も空間と同様、主体的なものである(生, 053)

注7：西欧の近代文化は、科学的知識の進歩に比例して人間の生活も幸福になることを当然のこととし、そこから近代的生活を導出してきた(認, 113)。近代科学の理論は、環境の風景の拡大と組織化を促進してきたが、そこで何を目的として如何に行動すべきかという知識の操作については何も教えていない(認, 141)

注8：沢田はある対象が持つ情報の特定パターンである映像を「イメージ」として用いているが、現代では心象や印象の意味で用いられることが一般的であるため、本稿ではイメージの用語は用いないこととした。

注9：各主体(現存在)の過去の経験の集積とみなされる概念

注10：地域は水田地帯で、高度成長期に地下水過剰み上げにより縫ノ池の水が涸渇し、1958~2000年は池に水が無かった<sup>11)</sup>。

注11：NSCA (national strength & conditioning association) MFLやMBAでコーチをするために必要な専門的資格

#### 参考文献

- 1) エドワード・ホール1966(日高敏隆・佐藤信行訳)：かくれた次元、みすず書房、1970
- 2) イーフー・トゥアン1977、(山本浩訳)：空間の経験、筑摩書房、1988
- 3) Twigger-Ross and David LUzzell：Place and Identity Processes, Journal of Environmental Psychology, Vol. 16, pp.205-220, 1996
- 4) Hay R：Sense of Place in Developmental Context, Journal of Environmental Psychology, Vol.18, pp.5-29, 1998
- 5) ユクスキュル/クリサート1934(日高敏隆・羽田節子訳)：生物から見た世界、岩波書店、2005
- 6) 沢田允茂：認識の風景、p.192、岩波書店、1975
- 7) 中村良夫：湿地転生の記、p.131、岩波書店、2007
- 8) 笠原知子：都市の形象への関心とその展開—明治・大正期の東京にみる3つの建設事例と専門家の言説—、東京工業大学学位論文、2005
- 9) 神山藍：『土佐日記』を対象とする「用」と「美」の風景の関係性に関する研究、土木学会論文集、Vol.79, No.7, 2023
- 10) 山村美保里：世代を超えて持続する市民活動の長期継続要因に関する研究—下諏訪町湖浄連を事例として、土木学会論文集D1, Vol.75, No.1, 2019
- 11) マルティン・ハイデッガー(1927)：存在と時間上・下、細谷貞雄訳、筑摩書房、1964
- 12) 山村美保里：農村集落における神社を核とした地域活性化活動の展開と継続の特徴—佐賀県白石町の弁財天を活動場所とした湧水会を事例として、日本建築学会計画系論文集、Vol.88, No.805, 986-995, 2023
- 13) 山村美保里：地域保全にかかる市民活動の持続性にみる風土的聖性の意味、東京工業大学学位論文、資頁1-28, 2023
- 14) 前掲書13)、資頁60